

AJU 愛光園だより

～私たちは、誰もが人間としての尊厳が保たれ、安心して共に生きる社会をめざします～



編集者：社会福祉法人 愛光園
本部事務局 愛知県知多郡東浦町緒川東米田33番3
TEL 0562-83-9835 FAX 0562-83-4344
URL <http://www.aikouen.jp/> E-mail honbu@aikouen.jp

第136号

介護保険と地域包括ケアシステム

高齢福祉事業部 事業部長 日高啓治

平成12年（2000年）の制度創設以来、介護保険制度は3年ごとに見直しが行われ、そのたびに自治体（保険者）は介護保険事業計画を策定し、保険料が変更されます。

またこの見直しの内容としては、介護サービスの設定等を変更し、介護報酬も改定がなされます。ちょうど来春は、この見直しのタイミングになり、国においては変更の枠組みが検討中で、各市町や広域連合においては第6期介護保険事業計画の策定作業中であります。

節目となる改定の際に介護予防サービスや地域密着型サービスの創設等の大きな転換を伴ったこともありました。今回の改定においては、地域包括ケアシステム推進の流れを一段と加速させるような施策や、そのための介護サービスの基準およびその報酬の設定がなされると見込まれています。

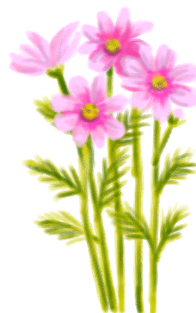
第6期介護保険事業計画を地域包括ケア計画と表現しているところもあるようです。

その詳細が現在審議されていますが、平成26年（2014年）春の医療分野における診療報酬改定や、6月に成立した「地域医療・介護総合確保推進法」とも関連付けされながら、在宅重視の流れのなかでサービスの多様化と効率化を図り、施設には地域内連携の要としての機能強化と地域特性に応じた機能分化を一層求められることになりそうで

す。そのなかでも、要支援者が利用する介護予防サービスのうち、デイサービス（介護予防通所介護）とホームヘルプ（介護予防訪問介護）は保険者（当地では知多北部広域連合＝東浦町・大府市・東海市・知多市）が介護報酬等を設定する地域支援事業となり、現行の事業者の他にもボランティア組織等の多様な提供が可能になるとされています。

さらには小規模デイサービスが、その地域の住民だけが利用する地域密着型サービスに移行する等により、その地域ごとの実情やニーズに相応しいサービスの提供体制と供給量がその地域（保険者）の裁量により構築できることを目指しています。このことにより、介護サービスに総量規制が始まると言われています。

私たち愛光園としては、これまで以上に地域の声に耳を傾け、必要とされるサービスを求められる速さで提供できる機動力と柔軟性を、より一層求められることになります。同時に保険者、医療機関、介護事業者等の地域内の関係機関との連携を更に進めねばなりません。細やかに丁寧な、よくみて、よくきき、よい展開を広げていきたいと思っております。



「相生の今」

介護老人保健施設相生 副グループ長 看護主任 伊藤 光江

相生では、お一人おひとりのその人らしさを大切にし、なにを望まれているのか、すこしでも笑顔多く、穏やかに安心して過ごしていただく為の支援を重視しています。

介護保険制度の改正により、創設された在宅復帰強化加算や診療報酬の導入等に関連して、在宅復帰を進めていくように求められています。相生では利用者の療養が長期化しており、平均入所期間は1年6ヶ月となっていますが、ショートステイ（短期入所）は月間延べ245日の利用があり、自宅と施設を頻繁に往復しながらご利用いただいています。

施設には定員という限界もあり、在宅での介護支援の可能な方を在宅復帰に向けて支援していくにあたり、居宅における介護サービスとの連続性を確認しながら、しっかり道筋を見出しながら行っていく必要があると考えています。また、終の棲家としての役割をもち、看取りにも力を注いでいます。昨年度は20名近くの看取りをさせていただきました。ご利用者・ご家族に寄添い、その人らしい人生の最期を迎えるお手伝いをさせていただき、多くの学びと共に感謝の気持ちで取り組んでいます。また、職員の自主的な協力による手料理で居酒屋を年4回開催し、ご利用者と職員で和気藹々とひと時を楽しんだり、中庭の花畑でお茶会をしながら外気浴にお誘いしたりと、お楽しみの機会を作っています。また、保育園との交流の場を持ち、地域との関わりを大切にしています。今後もご利用者やご家族が安心して幸せに暮らすことができるような施設でありたいと思っています。

いらっしゃいませ！

もちの木園ひもおり製品です！！



座布団
一枚500円



マット小（縦40cm×横60cm）
一枚500円



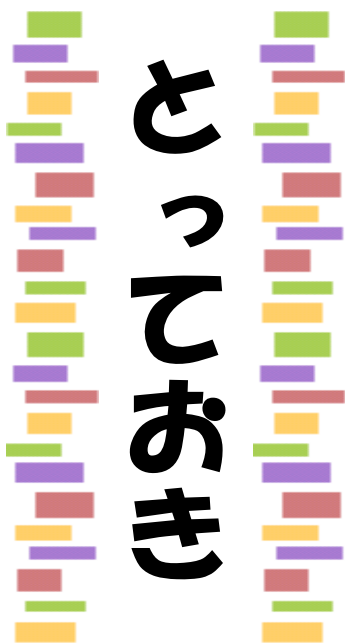
マット大（縦40cm×横100cm）
一枚800円



コースター（縦11cm×14cm）
一枚100円

とてもカラフルで個性豊か！もちの木園の利用者が手作業で織った作品です。それぞれが一点もの！ぜひお買い求めください！

（問い合わせ） 阿久比町立 もちの木園 TEL：0569-48-3885 FAX：0569-48-8871



わっしょい



ひかりのさとのぞみの家 小久保敏明さん

動物好きの小久保さんが、久しぶりの外出で愛知牧場に出かける時の一枚です。最高の笑顔が撮れました。またいけるといいですね。



「ケアマネジャーのひとりごと」

相生指定居宅支援事業所 ケアマネージャー 井内 さゆり

私たちケアマネジャーは「支援者」としての側面だけではなく、様々な経験を重ねてこられた方々の人生の後輩でもありますので、個人的には先輩方の考え方や生き方、また思わぬユーモアに触れて、励まされたり、人生について（自分はどう生き、老いて、死ぬか）学ばせていただくことがよくあります。

以前にこんなことがありました。ベッド上で寝たきりになられて数年の利用者、80代のA子さん。声かけに応じてくださることが減り、（運がよければ）ひとこと何か言われる場面に遭遇できるかというくらいの頃。その日、最初の挨拶の時には目をしっかり閉じていて、応答なし。ベッドの横でご家族と、介護に関係のある話ない話様々したあと、帰る前に挨拶しようとしたら、目を開けてみえるので、これは（声が聞ける）チャンスと思い、「もう失礼しますが、何かお話してくださいませんか」と声をかけると「う、う・・・」耳を澄ますと「う、う、うるさい」と緩んだ頬に小さな声。叱られたとわかったあともA子さんには失礼ですが、申し訳ないやら、うれしいやら・・・。3年くらい経って今はもう、声を発されることはほとんどなくなりましたが、その方のそばでご家族と話しているときはそのときのことが時々頭をよぎり、少し、声をおとしつつも、また叱ってくれないかなとお顔をみてしまいます。

98歳の女性B子さん。自分で食事も排泄もできる方でしたが、長生きされてきた分、戦争や伊勢湾台風も経験し、大切な方たちをたくさん見送ってこられた方でもありました。その方が、近所の方のことを「あのひとはええな。若い」「若い、ですか?」「まんだ、老人会に入っておられるそうなので」「・・・」。そうか、98歳の方からすると老人会に参加できる方は「若い」のか・・・。そんないつもどこかユーモアのあるB子さんもお亡くなる少し前にお会いしたときには「わし、ほんとのこと言とな、死んだことがないで、死ぬのがおそがい（怖い）ような気がするわ」と。確かにそうだな、とそのときに他の利用者さんの顔も浮かび、妙に納得したのを覚えています。

確かに介護保険の役割のなかで、支援者ではあるけれど、一方的な関係ではなく、いろんな人生から学ぶことの多いこのケアマネジャーという仕事は、大変魅力的で、やりがいのある仕事だとおもっています。

136号・137号 連続企画

事業所の

私の

今と夢

みなさん、お元気ですか？愛光園だよりでは、各事業所の「今」と『夢』を、現場の職員に元気に語っていただこう！！と思います。

「こんなファームになりたいな」

ひかりのさとファーム 中村章吾

気づけばファームで働かせてもらうようになり2年目を迎えました。法人愛光園での勤続年数も7年目となり、チームの中での自分の役割であったり、組織から求められていることなど考えるようになりました。そのような中で過ごす、新しい職場での生活も毎日がとても新鮮で、あっという間に過ぎていくような気がします（ファームの広報誌、かきどおしにも以前書いた気がします…）。

入所施設から通所施設へと働く場所が変わり、仲間の方々と仕事をしていくうえで地域生活というものがより身近になってきたように感じます。自分の暮らしたい場所で暮らし、自分のやりたい仕事をして給料をもらい、そのもらった給料で買いたいものを買いたいところ行く、そんな当たり前がかけがえのない生活がそこにはありました。

また、以前、仲間の方に向けてとらせていただいたアンケートの結果には80%近くの方が「仕事が好き」と答えられていて、就労継続B型及び60歳以上の方を対象にすると90%に近い方が「今の仕事を続けたい」と答えられています。改めて、みなさんの働く場であるひかりのさとファームの担ってきたものの大きさと、これから果たしていかなければならないものを感じました。

今年度、事業計画には工賃のアップが挙がっています。これは、ファームで働いている仲間の地域生活をより充実したものにしていくためには、とても大切な事だと思います。もちろん、一言に工賃アップといっても簡単

な事ではありません。ファーム一丸となって取り組んでいかなければいけない事でしょう。

また、これからのファームにとって大切なことの一つとして、より多くの方にファームを知ってもらうことが大切になるのではないかな、と思います。

ファームで働くようになり思うことの一つとして、ひかりのさと近辺で暮らしている方々のどれくらいの方がファームのレストランや商品などを利用されているのだろう、ということです。

全国からお取り寄せが殺到する、そういったお店ももちろんうらやましいですが、地域の方に必要とされ長く愛される、そんなファームでありたいと思うのです。知ってもらう、というより繋がりを深める、という方が適当かもしれません。

ひかりのさとの周りには法人愛光園で暮らす人々や団地の皆様をはじめ、カフェや喫茶店、体操教室、公園など人々が集うことのできる場所がたくさんあります。そういったものがバラバラに存在するのではなく、一つの街として賑わうと楽しそうだなあと感じます。周りのお店とコラボ商品を考えてみたり、一緒に地域の祭りへの出店を行ってみたり、団地の方の要望にお応えできるようなケータリングサービスを行ってみたりなど、いろいろな人がいて、いろいろな場所があり、いろいろな関わり合いがもてる、そんな街になるといいな、と感じます。その中でファーム自身も街の一つとしての役割をもち、皆様と繋がっていける、そんな事業所を目指したいと思っています。

「将来を見据えた生活支援としての 食事のあり方」

愛光園地域居住サポートセンター
田中孝典

グループホームにおける支援は、単に安定した衣食住の場を保障するというだけでなく、より健康にその人らしく生活していただくためには、どのような・どこまでの支援を提供すべきなのかという視点が必要となります。

たとえば、食事ひとつをとっても、ただ調理をして提供したものでおなかを満たしていただくということだけが目的ではありません。“食べる”ことはそれぞれの人の人生にとって、深く大きな意味合いを持つものです。何を大切にして支援を提供していくのかは同じでも、個別に重視すべき視点が異なります。

その中で、今課題として思うのが、栄養管理についてです。現在、グループホームでの食事内容は、肉、野菜、魚など、バランスの良いメニューをそれぞれのホーム担当者が考え、提供させていただいています。

しかし、適切な量やカロリーがどれくらいなのかなど、個別のニーズへの配慮も含めて、一定の知識を持つでの対応には残念ながらなっていません。スタッフ個々の経験に任されているのが現状であり、また、その経験を共有するところまでには至っていません。

現在、居住サポートセンターのグループホームに居住される方の平均年齢は47歳。

高齢化が進み、より日々の食事が健康状態の変動に直結してきています。年齢に合わせた量や内容の見直しが、個別に一層必要となってきました。

また、ご本人の生き方、選択の自由と、それともなうリスクの可能性の認識（好きなものを好きなだけ食べたい気持ちと、そうすることで健康状態がどうなるかなど）とのす

り合わせも難しい課題です。

リスクがあるからと言って制限ばかりかけてしまうと、『生活の質としてどうなのか』という問題もでてきます。年々体重が増えている方もいらっしゃると思いますが、一概にそれが悪いのかどうか。

利用者が健康で長く地域の中で自分らしく生活するために、関わるスタッフ全員が共通認識を持ち、コミュニケーションをとりながら、食事のこと、特に今は栄養管理について、確かな知識に基づいた支援を行っていく必要があると考えます。

私が今後実現できたら良いなと思うことは、スタッフ全員で集まり、日々の献立についてグループディスカッションをする機会を作ることです。食事を実際に作っているスタッフが、こだわっているポイントや個別対応の状況について発表をし、食や栄養管理の知識を持つ方（たとえば栄養士）に講評してもらうのはどうでしょうか。

一定の知見を得て、より個別のニーズに合わせたメニュー作りができるのではないのでしょうか。また、不安に思っていたことがみんな話合うことによって解決したり、同じような悩みを持っていることがわかり、スタッフ間の連携が生まれたり、士気が高まったりすることも期待できます。そんな研修ができればよいなと思い、実現に向けて構想し、提案していきたいと考えています。

みやづホームある日の夕食

鮭のムニエル・マカロニサラダ・人参とジャガイモのグラッセ・煮豆・コーンスープ・ご飯



「これからの夏祭りにむけて」

障がい者活動センター 愛光園

山田達也



8月8日（金）に、障がい者活動センター愛光園では夏祭りを行いました。

例年の夏祭りは、仲間が通所する日中の時間帯で行っていましたが、しかし、それでは時間が足りず、せっかく楽しい出店の企画をしてもすぐにタイムリミットとなり、盛り上がってきたところなのに終了しなければならないという問題がありました。

今年度の愛光園では、全体行事の内容の充実を図るという目標を立てて、まずはスタッフ間でどのようにしたら夏祭りが盛り上がり、仲間が楽しめるかを話し合いました。

花火、バーベキュー、ゲストを呼ぶなどの意見がでて、これを実行していくには、大きく時間帯を変える必要があり、今までの日中の時間帯から夜間の時間帯で行えないかということになりました。

まずは夜間の時間帯でご家族での送迎はできるのか、当日スタッフが一緒にまわるのは難しいので、ご家族と一緒に参加してもらえるかの確認のアンケートをとりました。夜間だと色々問題点も多くでてくるかと思っていましたが、多くの方が参加できると答えてくださり、このような企画を感謝して下さるご家族もたくさんみえたことに驚きました。仲間に説明をした時も、楽しみにしている方が多く見え、これでスタッフもやる気に火がつき、計画もスムーズに進めていくことができました。



夏祭り当日は天気の心配もあり、ギリギリまで園の中でやるか外でやれるかを気にしてスタッフは携帯電話の天気予報ばかりチェックしていましたが、みんなの願いも届いたのか、無事に外で行うことができました。

仲間、ご家族、スタッフ、ボランティア、ゲストを含めて120名近くの人数が愛光園に集まりました。仲間が計画・作成した出店やビデオ、盆踊り、お父さん方が焼いてくださったバーベキュー、大道芸人やスチールパンという楽器を使った楽団のゲスト、最後には花火もやることができ、祭り自体もかなり盛り上がり終えることができました。

仲間も普段味わうことのない夜の愛光園や、それぞれの催し物で楽しそうな笑顔をたくさん見せてくださいました。いつもは笑顔をあまり見せることのない方も、この日は笑顔を見せてくださったり、食欲の波がある方もたくさん食べることができたり、普段とは違う仲間の一面を見ることができました。一緒にまわってみえたご家族も、本人さんの笑顔を見て嬉しそうな表情をされている方も多くみえました。

近年の愛光園では、ご家族と一緒にを行うイベントは少なくなっているように感じていました。しかし、今回のように一つのイベントをみなさんと協力して作り上げていくことができ本当に嬉しかったです。反省点も色々ありましたが、来年も是非続けて欲しいという声をたくさんいただいたので、これからも皆さんが楽しめるイベントをたくさん企画していきたいと思います。今回の夏祭りにご協力して下さった皆さん、本当にありがとうございました。



「ヘルパー・サポーターとのつながり」 知多地域障がい者生活支援センター らいふ(直接支援部門) 神谷勇太



現在らいふ直接支援では男性5名、女性4名のスタッフ、登録ヘルパー・サポーター39名が在籍しています。

らいふはサービス対象地域が広範囲のため、スタッフだけではご利用者の要望全てに応えることは難しいのが現状です。定年退職された方、他法人での介護経験がある方、主婦、福祉職を目指している大学生と、様々な立場・経験を持たれた登録ヘルパー・サポーター(アルバイト)の活躍により、少しでも多くの要望に応えることができています。また、夏休みなどの利用者数が増加する長期休暇もご利用者とお付き合いを重ねたサポーターが居てくださり一緒に過ごしてもらえるので、スタッフも安心でき毎日を楽しく安全に過ごしています。

ヘルパーは記録の確認や作成で事務所に来てくださいますが、私は支援で事務所にいる時間が少なく、ヘルパーとあまり話す時間を取ることができません。しかし私がお本人やお家族とお会した時に「この前のお出掛けは楽しかったよ、〇〇さんとまたお出掛け行きたいな!」とお言葉をいただくことがあり、楽しんで帰って来られたことを知ることができます。そのお言葉は必ずヘルパーに届けるようにしています。移動支援(水族館・プールなどの外出の付き添い)はヘルパーと利用者の2人だけで動くことが多い支援なので、普段ヘルパーがどのような支援をしているかを直接見るのが難しいのですが、このようなお言葉をいただくとスタッフとして誇らしく思い、安心することができます。そして、自分も一支援者としてご利用者により楽しんでもらいたいという気持ちになります。

ご本人やお家族からお言葉をいただいた時の嬉しい気持ちを支援者間で共有することが支援者同士のつながりを強め、支援に対する気持ちを再確認し合える大切な時間になります。

また、私は25年度からサポヘルメンターという業務を担当しています。メンターとは「良き助言者」という意味で、せっかくらいふでヘルパー・サポーターとして働いてもらうなら安心して一緒に楽しんでもらいたいというスタッフ全員の意見から始まりました。

具体的な内容として、事前のレクチャー・支援後のフォローの時間を充分に取ることはもちろん、ただ必要事項だけを話すのではなく、お茶を飲みつつ仕事以外のことをゆっくり話す時間を作ったり、暗くなるのが早い時期・暑さが厳しい時期は最寄駅までの送迎も実施しています。

毎月の全体会議では翌月の目標「サポーターさんの良いところを見つけ褒めよう!」、「熱中症対策!お茶出し強化を!」や「支援終わりには駅への送迎を!」などを掲げ、気持ち良く働いていただくようスタッフ全員で取り組んでいます。その甲斐あってか、ボランティアからサポーターへの継続率が24年度は39.5%だったのに対し、25年度は70%に上がりました。さらに、法人愛光園の就職試験を受け2名の方が今年度より職員として働いてくれています。

らいふ直接支援は登録ヘルパー・サポーターの協力があって成り立っている事業だと改めて感じています。らいふに来てくださるヘルパー・サポーターと支援に対する想いを共感し合い、つながりを大切にすることで、障がいのある方への理解者が増え続けるのではないかと思います。支援者同士のつながりが地域とご利用者のつながりになり、今より一層ご利用者の望む生活の実現をお手伝いしていけたらと思います。



平成二十六年六月十日発行（増刊）（毎週火曜日）発行所・東海身体障害者団体定期刊行物協会 名古屋市中区丸の内三十一番四三三 みこころセンター四階 定価五〇円

「安心して通い続けられる場所 でありたい」 もちの木園 金城 守

もちの木園の管理・運営を愛光園が受け持つ事になり3年目を迎えました。

現在、もちの木園では日中活動としてエアコンのモーターコイルの組み立て、ペットフードのサンプル品の袋詰め、レンタルDVDケースクリーニングの作業を中心に行っていますが、安定した工賃とはならない為、農作業（花苗・野菜苗・野菜など）にも力を入れるようになりました。

現在は多くの部分をボランティアさんの力に頼っているのが現状です。まずはその現状の改善に取り組んで、良い品物を作り、多くの方に購入していただいて安定したお給料を支払っていただけるようにする事が作業面での目標です。

また、あるご利用者のご家族に予期せぬ出来事があり、その事によって支援力が低下してしまった事で“これからの暮らし”の対応を考える機会がありました。

今の状況を改善するにはどうすべきか、その中で長年通ってきているもちの木園はどのような役割ができるかなど、関係諸機関が集まり意見交換をしました。その結果、しばらくの間住み慣れた地域から少し離れた場所で暮らす事になりましたが、送迎サービス

を利用する事で通い慣れたもちの木園を今まで通り利用することが可能となり、いつものように変わりなく穏やかに過ごされています。その事は『ご本人にとって園が安心して通える大切な場所になっているのだ』と支援者としてありがたく思う出来事でした。

もちの木園のご利用者は高齢の方も多く、これから生活面でいろいろな変化が起こると思います。暮らす場所、生活様式の変化があっても、もちの木園がご利用者にとって大切な場所であってもらえるように今後もよりご本人に寄りそった支援を目指していきたいと思います。

これからも温かいご支援・ご協力、宜しくお願いいたします。

大きい玉ねぎ、たくさん獲れました！



ひかりのさと案内図 JR東海道線大府駅下車、タクシー(15分)が便利です

